

## タイの高校における日本語教育実習

星 千尋

## 要 旨

筆者は、2016年度の秋学期に SEND プログラム<sup>1</sup>の長期派遣でタイのチュラーロンコーン大学に派遣された。研修では、大学での日本語教育実践、そして、高校での日本語教育実習をした。高校では、2年生の日本語の授業を週1回2コマ担当した。授業をしていく中で、学生は日本語の会話を苦手としている、文型練習では全員が参加していないといった問題点が出てきた。それらを改善するために、会話の練習を増やし、さらにゲームを使って文型練習をする取り組みをして改善をした。その結果から、学生が積極的に話すようになり、学生同士で学び合いが生じるようになった。本稿では、高校の授業における問題改善の取り組みについて述べる。

## キーワード

SEND 長期派遣プログラム タイ 高校 日本語教育実習

## 1. はじめに

筆者は、2016年8月から12月の4か月間、SENDの長期派遣プログラムでタイのチュラーロンコーン大学に派遣された。研修は、チュラーロンコーン大学での日本語教育実践、そしてバンコク内の高校での日本語教育実習である。その研修の中から、本稿では、高校における日本語教育実習について報告する。

## 2. 高校での日本語教育の概要

筆者が教育実習を行った高校は、私立の男子高校である。高校では、英語以外の外国語は中国語、日本語、ドイツ語がある。学生はここから選択し勉強する。筆者が担当したクラスは2年生であり、学生は13名である。高校の日本語の授業は、週3日あり、計6コマある。筆者は、水曜日の2コマの授業を担当した(表1)。水曜日は、筆者とタイ人常勤教師が担当をするが、筆者がすべて授業内容を考え、メインティーチャーとして教える。タイ人常勤教師は、筆者の日本語の説明の中で学生に伝わっていないときに、タイ語で通訳をするといった筆者の補佐をしてくださる。使用教材は、タイ語母語の日本語学習者向けの国際交流基金『日本語あきこと友だち』である。筆者が担当を始めた8月の時点で、『日本語あきこと友だち』の3冊目の14課、「比較」を勉強しているところだった。

表1 実習先の高校の日本語授業担当表

	火曜日	水曜日	木曜日
担当教師	タイ人非常勤教師	筆者	タイ人常勤教師
教師の使用言語	タイ語	日本語	タイ語
担当コマ数 (1コマ50分)	3コマ	2コマ	1コマ
主な指導内容	①文型・文法導入 ②漢字	①火曜日の復習 ②練習	①日本文化/事情

### 3. 高校の日本語教育実習

#### 3.1 日本語の授業実習

##### 3.1.1 前期の授業の流れ

筆者は水曜日に火曜日に導入された文型や文法の復習、練習を中心に授業を展開する。

例えば、15課の「た形、～たことがある」の練習は、1) 前日の復習（た形の活用の確認）2) 文型練習（パワーポイントを使用した転換練習）3) 「～たことがある」経験の文をつくる練習（自分の経験を話す）4) 応用練習（友達に経験を聞くテーマでインタビューをする）という流れで授業をした。しかし、このような授業の展開をしていくなかで、問題点がみえてきた。

##### 3.1.2 授業で見えてきた問題点

筆者の授業の中で見えてきた問題点は2点ある。

まず1点目は、話すことを苦手とする学生が多い点である。応用練習でインタビューをした時である。筆者が学生に日本語で質問をすると、学生は話せないのか恥ずかしいためか、筆者とは話さず別の学生に通訳をお願いし、時には逃げてしまうということもあった。さらには別の課の応用練習の時、日本語で話すのではなく、学生はタイ語で話し、練習をしていない様子もあった。このような様子から、学生は日本語を使って話すことに慣れておらず、抵抗があるのではないかと考えた。

2点目は、文型練習で学生全員が参加する場面が少ない点である。例えば、筆者がフラッシュカードを使い、学生全員で答えを言う練習の時、答えを言う学生は半数であり、残り半数の学生は、わからないためか、反応がなく答えを言わない姿があった。さらに、「順番にひとりずつ、た形を言ってください。」と指示を出しても、一人が答えると周りの学生はタイ語で話し始めてしまい、周りの学生の答えを聞くといった場面は少ない。そのため、ある学生が間違えた答えを言ったとしても、周りの学生は気づかず教師だけが修正する。学生同士で修正し教え合うという場面は少なかった。

以上2点の問題点から、後期に向けて授業の改善をはかった。

### 3.2 授業内容の改善

前期で見た問題点から、以下のように後期の授業内容を改善した。(表 2)

表 2 授業の改善案

	授業改善前	授業改善後
授業の流れ	1 コマ目 ① 前日の文法確認 ② 文型練習・転換練習 ③ 文の作成練習 2 コマ目 ④ 応用練習 ⑤ 漢字練習	1 コマ目 ① <u>ディクテーション</u> <u>漢字の小テスト</u> ② <u>日本語ではなしましょう</u> ③ 前日の文法確認 ④ 文型練習・ <u>ゲームで文型練習</u> 2 コマ目 ⑤ 文の作成練習 ⑥ 応用練習 ⑦ <u>前週の漢字の小テストなおし</u>
問題点/改善点	① 日本語で話すことを苦手としている学生が多い。 ② 文型練習の時、全員が参加していない。	① 会話練習の時間を増やす。 ② 文型練習の時、全員が参加する工夫をつくる。

### 3.3 会話の改善—会話練習「日本語ではなしましょう」

ディクテーション後に「日本語ではなしましょう」という会話練習を実施した。これは前期の問題点であった日本語を話すことを苦手とする学生が多いという理由から取り入れた。これは、会話文のテーマと会話の見本を提示し、会話練習をするものである。テーマは、「好きな食べ物」、「好きなスポーツ」、「趣味」といったものである。会話文は前の課で勉強した文型を取り入れたものにした。さらに、下の会話文の例(図 1)の下線部では、自分で考えて話すように伝えた。

かいわ (れい)

A: B さん。スポーツの中でなにが好きですか？

B: うーん、そうですね。ムエタイが一番好きです。 A さんは？

A: わたしは、サッカーが好きです。

B: いいですね。好きなせんしゅはだれですか？

A: わたしは、プアカーオが好きです。 B さんは？

B: わたしは、ロナウドが好きです

図 1 すきなせんしゅ (11 月 15 日に実践した会話内容)

会話練習の流れは、1) 全体で発音の練習と意味の確認をし、声に出し練習する。2) 会話は全員立って 2 列に並び、互いに向き合いペアを作る。3) 会話に入る前に、必ず互い

に挨拶と自己紹介をしてから会話をはじめ。なぜなら、筆者と学生が初めて会ったとき、自己紹介がなかなか言えない学生が多くいたためである。4) 会話終了後、必ず「ありがとうございました。」とあいさつをする。

前期では少なかった日本語の会話練習を増やすことで、日本語で話すことに対し抵抗がなくなるように問題解決に取り組んだ。授業後に筆者の授業に関してアンケートを取った。その回答の中には、「会話がたくさんできてうれしい。」や「勉強したことが話せるようになってうれしい。」というものがあつた。

### 3.4 文型練習の改善—ゲームを使った文型練習

新しく取り入れた練習の一つにゲームを使った文型練習がある。これは、前期の問題点であった文型練習で全員が参加して取り組む工夫をしたかったためである。前期の授業において、日本語を使ったビンゴゲーム、クイズといった活動では、全員が競い合って勝ちたいという気持ちから、集中して取り組む様子がみられた。この様子から、全員が参加して勉強できるゲームを使った文型練習を取り入れようと考えた。

11月の授業で、可能形を勉強した時である。可能形のフラッシュカードの練習後、可能形のかかるゲームを実施した。このかるたには1枚1枚可能形が書いてある。例えば、筆者が、「日本語を話します。」と文を言った後に、「話します」の可能形「話せます」というかるたを先にとった人が勝ちというルールである。そして必ず最後に全員で答え「日本語が話せる」という答えを言って可能形を確認する。さらに、ダミーのかかるたも混ぜ、正しい可能形を選ぶか確認をした。例えば、つくられる、見れる等である。

ここでは、誰かが、間違っただかるたをとったとき、「違う。これこれ。」といって、正しい可能形を教え合う姿も見られた。さらに多くの学生は、正しいかるたをとるたび、「先生、これですか?」と筆者に確認していた。可能形を勉強できるだけではなく、短い質問であっても日本語で確認することで日本語の使用機会も増やすことができた。

### 3.5 授業内容改善後の結果

以上の授業改善の取り組みにより、どのような結果が得られたのかについて、以下の表にまとめた(表3)。

表3 改善前改善後の授業比較

	授業改善前	授業改善後
授業内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・機械練習が多い。</li> <li>・会話練習が少ない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・会話練習の時間を作った。</li> <li>・ゲームを使った文型練習を取り入れた。</li> </ul>
学生の様子	<ul style="list-style-type: none"> <li>・会話を苦手とする学生が多い。</li> <li>・文型練習の時、全員が参加していない。</li> <li>・一部の学生は筆者と日本語で話す時、通訳を友だちにしてもらい、自ら日本語で話そうとしない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・積極的に日本語で話そうとする学生が増えてきた。</li> <li>・ゲームを使った文型練習では、学生全員が参加して取り組むようになった。</li> <li>・学生同士で日本語を教え合う姿がみられた。</li> </ul>

### 3.6 結果からの考察

授業内容改善後は、学生が積極的に話すようになり、学生同士の学び合いも生じた。これは、改善前には見られなかった点である。

改善前の授業では文型の機械練習が多く、習った文型を使ってどのように話すのかという筆者の説明や練習が少なかった。そのため、学生は文型や文法は理解できたが、どのように使って話すのかという理解までにはつながらなかったと考えられる。

改善後は、既習の内容を会話練習に取り入れ、応用練習でも使用場面を提示し話す練習を増やした。その結果、学生は勉強したことを使って筆者に日本語で話したり、応用練習では、学生同士で日本語の会話文をオリジナルで作って発表したりするというように積極性が増し、さらに学び合いが生まれたと考えられる。

しかし、ゲームを使った文型練習では、全員が参加するという成果は得られたが、時間の超過やゲーム後に学生の集中がなくなるといった課題もみつかった。時間調整や授業の流れの改善といったさらなる工夫が必要である。

## 4. おわりに

前期での授業での問題発見、後期での問題解決のための授業改善によって、今までの筆者の授業を見つめなおすことができた。教師としての課題はまだ多くあるが、ひとつひとつの課題と向き合い向上していきたい。

## 注

- 1 SEND (Student Exchange Nippon Discovery) プログラムとは早稲田大学日本語教育研究科と日本語教育研究センターが主体となり、「大学の世界展開力強化事業 (ASEAN 諸国との大学間交流形成支援)」に採択されたプログラムである。ASEAN 地域における代表的な日本語教育機関であるシンガポール国立大学 (シンガポール)、タマサート大学 (タイ)、チュラーロンコーン大学 (タイ)、デ・ラ・サール大学 (フィリピン)、バジャジャラン大学 (インドネシア)、マラヤ大学 (マレーシア) の 6 大学、及び 2014 年度よりコンケン大学 (タイ)、チェンマイ大学 (タイ)、ナレースワン大学 (タイ)、南洋理工大学 (シンガポール) の 4 大学を加え、計 10 大学と早稲田大学が協働している。このプログラムは、長期派遣と短期派遣とにわかれており、筆者は長期派遣で派遣された。

## 参考文献

国際交流基金 (2004) 『日本語 あきこと友だち』 BOOKS Kinokuniya Thailand.  
Waseda SEND program <http://send-waseda.jp/> 2016 年 11 月 23 日参照

(ほし ちひろ 早稲田大学大学院日本語教育研究科・修士課程)